

小浜町とバンフ

バンフでの思い出

七条 健

バンフの皆さんは、お変わりなくお過ごしでしょうか。思い返せば一九八一年七月、姉妹盟約五周年を記念して御地を訪ねてから、早くも二年になります。バンクーバーでバンフ・スプリングス・ホテル太平洋地区セールスマネジャーのシモン氏と奥様に迎えられ、専用バスでバンフへ向かいましたが、雄大な山々とそれを取りまく大自然のスケールの大きさに、一同、感嘆したものです。

宿舎のバンフ・スプリングス・ホテルは、七月がハイシーズン。世界各国の来客で賑わいを見せていました。出迎えに集まった方々は、雲仙にもお出でになった

●バンフ

翌日は色々な催しが計画

人ばかり。バグパイブの演奏が続いて、カナディアン・ステークととうもろこしのすばらしい歓迎夕食会。夜の更けるのも忘れるほどの楽しい交歓会で、時計を見るとすでに十時を過ぎていました。しかし外は夕方ほどの明かるさ。初めての白夜体験でした。

されていました。ゴルフ、釣り、登山……とそれぞれのグループに分かれて、地元の方々との交流を深めました。私はゴルフに参加したのですが、ホテルに隣接したゴルフコースは、自然を巧みに取り入れた、なかなかの難コースでした。ところどころ芝生の枯れたところがありましたが、訊いてみると、野生動物が自由にコースへ出入りし、草を食べたり放尿するためだそうです。日本では考えられない自然の姿に接して、感動しました。

この日の朝食をクラブハウスでとっていると、リスが数匹私に走り寄って来ました。かわいさの余り、手にしたパンをちぎったとき、ハッとバンフ入りの際のガイドの言葉を思い出しました。「やるまい」「おるまい」「すてるまい」がバンフでの約束ごとだ、というのです。動物に餌を与えてはいけなかったんだ——とあわてて手を引っ込めました。そんな私を見て、シモン氏が、きょうは七条のために特別にOKだと言ってくれたので、私は悪いと思いつつパンを与え、リスのかわいさに見とれたものです。

冬期には、山を降りた熊が、人家のドアを叩く。熊におそわれたら、山を登るのではなく、山を下りる方が安全とだ、

いう面白い話もありました。翌朝起きてびっくり。七月だというのに、昨日のゴルフがまるで嘘のように、外は一面の銀世界になっていたのです。私たちは、あわててありつただけの服を重ねるありさまでした。

滞在最後の夜のお別れ会で、姉妹提携五周年記念として、バンフよりロッキーマウンテンの巨岩を贈ると発表があり、台車に積まれた岩に一同びっくりしました。これをどうして雲仙まで持ち帰るか、思案しましたが、よく聞くと、記念碑として地に残すとのことで、一安心しました。お約束下さったマウンテン・シープの人は、雲仙の子供たちが首を長くして待っています。

雲仙は、今年、国立公園設定五十周年を迎えましたが、バンフは百周年ではないでしょうか。



ゴルフ場のクラブハウスの前で。中央が七条氏。

雲仙はいま紅葉が終わり、霧氷の季節に入ろうとしています。再びバンフの皆様にお逢いできるのは、カナダでしょうか、それとも雲仙でしょうか。その日を私たちは楽しみにしております。

(長崎県雲仙公園・九州ホテル専務)

●小浜町

カナディアン・ロッキーマウンテンでもひととき美しいバンフ国立公園。国際的に知られたこの公園は、長崎県と佐賀県を合わせたほどの広さで、山々は氷雪をいただき、森林には熊や大ジカ、マウンテン・シープなどが自然そのままに徘徊する。一八八〇年にカナダ最初の国立公園に指定されて以来、厳しい環境保護がなされ、「森と湖の国」の象徴となっている。その中心が人口約三千人のバンフ。保養地としてだけでなく、ウィンター・カーニバルやスキーなどの各種スポーツ競技、バンフ美術学校とそこで毎年開かれる芸術祭、などとも有名である。

そして長崎県小浜町は、日本のこれまた国立公園第一号である雲仙国立公園の中心。春はつつじ、夏は避暑、秋はもみじ、冬は霧氷で知られ、国内外から訪れる人はたえない。

国立公園第一号同士が姉妹縁組をしたのは一九七六年五月。これまで相互訪問などを通じて、友好を温めている。